

<著書紹介> 『琉球与那国方言の研究』

野原, 三義

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

57

(終了ページ / End Page)

59

(発行年 / Year)

1995-02-24

<著書紹介>

『琉球与那国方言の研究』

野原 三 義

平山輝男先生との共著である。中本さんは国語学会の機関誌『國語學』41輯（1960年）に「沖縄南部の一・二音節語のアクセント」を書いている。しかし、著書はとなると、これが最初である。1964年、28歳のときであった。共著の平山先生は樺太までも調査されたという方で、その方と一緒に62年の9月から12月までの100日余の朝から晩までの調査を行ったのである。当時は交通の便も悪く、与那国に21日間とじこめられたというが、これ幸いと、いっそう調査したというのである。方言クラブの早創期に松川塾（仲宗根政善先生のお宅）で朝昼晩ぶつとうして勉強したという話を聞いたことがあるが、それが100日続いたわけである。学問の未知なるところの解明のために、師弟あいたずさえて、方言の沃野を猛然と突っ走っているというところであろうか。

本書は総論、音韻、アクセント、文法、語彙の5編からなっている。題は与那国とあるが、著者たちには、この調査以前の長年の蓄積があったから、ほとんど全琉球的な比較がなされている。アトランダムに幾つかあげてみる。

琉球方言の母音は、たいてい5母音であるが、与那国方言は、変化してしまってi、a、uの3母音である。音素iは「東京方言のiやeに近い広さをもって発音される」が示差的でない。音素uは「東京方言のuやoに近い広さをもって発音される」が示差的でないという。感情的になると、このi、uは、さらに別の音声まで観察されるというが、やはり弁別的でないという。このような現象は、壮年層で顕著であるが、青少年層では、変わってきているという。今から30年前に、年齢層による言語を観察して、その差異を認めていたのである。1959年の柴田論文の5母音節に対して、明瞭に否定している。

琉球方言で珍しい所謂ガ行鼻濁音があり、アカルン（上がる）、マーカ°（孫）のように語中、語尾で用いられる。語頭にたたないという点、昔の東京方言に似ているわけである。

有名なj → dの対応である。da：（家）、dama（山）、du：（湯）、duru（夜）などと多くの例があがっているが、そうならない例としてuja（親）、maju（眉）、maju（猫）、ujubi（指）などの例もあがっている。だいたい、語頭のjはdになるが、語中・語尾はjのままであって、dにならない、即ち、音素の環境の相違によって起こったものだというのである。そして、このdになることについて、非常に古い日本語の現象を残しているという考えがあるが、「今一度検討してみる必要がある」と慎重な態度である。与那国もそうであるが、南琉球で一般的なw → bの現象について、「これまでいわれているように、古形と考える」と

している。

文法の活用形のところにバ系統とヤ系統の二種類の条件形が設けられている。前者はカキワドゥ ナイル（書かねばならない）という場合のカキワで、ワはバの変化したものであるという。カキバナなどの縮まったものとした従来の考えを訂正している。後者はカケー マシ ヤターン（書けばよかった）という場合のカケーで、カキにヤが融合してできた形という。与那国方言の「書く」の終止形カグンは、宮古・八重山・沖縄の類似形の場合も同様、連用形＋ワリからなっているという。しかし、これは66年に「連用形＋居るもの」説に変化していくことになる。沖縄方言は融合現象がよく発達しているが、与那国はカティヤン（書いた）のような形くらいで、石垣のカケー（書いてある）、カキン（書いている）、カコールン（お書きになる）のようにも発達せず、その点、宮古の方言に似ているという。

カヌ ダマヤ タガン（あの山は高い）のように、（高い）はタガンという。サアリ系統のサの脱落した形に由来している。（高くない）をタガミヌンというが、これは語幹タガに打ち消しのミヌンが付いた形という。言い切りにあたる形にアガンタイ（赤い）、フルチチ（黒い）、ヒチタティ（薄い）、ツダーリ（白い）など、形容詞に付くタイ、チチ、タティ、ダーリの形は、琉球方言でも珍しい形という。

打ち消しの助動詞ヌンは、文語の「ぬ」に相当し、ヌン、ヌ、ヌルなどと活用する。竹富町の黒島、古見などにも、それらしい形があり、琉球方言でも珍しい形だという。沖縄方言のカカン（書かない）のンも、文語の「ぬ」にそのまま当たるのではなく、連用形のニにワリが付いたヌンが変化したものであるという。いっぽう「ず」系統の打ち消しは、琉球ではあまり見られないという。宮古の（書かない）はカカジャーンというが、これはカカディ（書く）＋アラン（違う）に由来する形といっている。

文法の最終は助詞の項である。筆者は1964年に本書を著者割引きで購入したと思うが、真面目に利用したのは、4～5年たってからであろう。それでもこの部分は、赤線やら書き込みやら汚れが目立つところである。冒頭に、助詞研究は、琉球方言研究でもっとも進んでいないところだと指摘されている。与那国方言の54の助詞について記述が行われており、6章の助詞文例は、おもに南琉球の20数カ所の比較がみえるように書かれている。もっとも恩恵を受けたところである。方向の助詞の狩俣のイは、カイ系統の変化だと既に述べられている。造詣の深い先生が「へ」に関係があるのではないかと匂わす発言があったり、『おもろさうし』に「ゑ」があったりするものだから、筆者は、いくらか逡巡していたが、分布などから見てカイ系統だと思ったのである。しかし、よくよく読んだ本書に、明瞭に書いてあったのである。不勉強のせいなのか、年月のせいなのか、なんだかよく分からない。筆者にとっては、そこが出发点だったのだから、下敷きには、ちゃんとある訳です。しかし、同じムンチュー（門中）みたいなものだからイーデスヨネ。

1964年の『琉球与那国方言の研究』は、66年の『琉球方言の総合的研究』、67年の『琉球

先島方言の総合的研究』と共に、同じ方法で、琉球方言圏を俯瞰していくことになる。中本さんは常にエネルギーが豊富であったが、この三部作の頃は、歳あたかも三十というあたりで、若さに満ち満ちていた。将来、方言地理学や言語波及論へと発展していくが、彼の人生で、もっとも基礎的な部分は、この頃、きずかれたのであろう。なかんづく『琉球与那国方言の研究』は、出発点とって間違いない。

(沖縄国際大学教授)



小湾調査に参加されたお元気な中本先生 (1990)